

研究ノート

社会システム論の系譜 (IV)

— ヘンダーソンとパーソンズ；パレートの方法論をめぐって —

赤坂真人

IX ヘンダーソン イン パーソンズ (2)

パレートの方法論

ヘンダーソンとパーソンズによる継承

IX ヘンダーソン イン パーソンズ (2)

繰り返し述べてきたように、ヘンダーソンによる熱心なパレートの紹介と啓蒙は、1930年代アメリカの社会学者にパレート理論の流行をもたらした。それは1935年にパレートの『一般社会学大綱』が英訳されたことによって頂点に達したと見てよい。ヘンダーソンによるパレートの紹介は、主に方法論に限られていたが、それはとりわけシステム分析の手法を強調することによって、アメリカ社会学に「社会システム論者」としてのパレート像を定着させた。もちろん科学哲学者、科学史家としての顔を持つヘンダーソンによって展開されたパレートの方法論をめぐる議論が、社会学における認識論や科学方法論に重要な影響を与えたことは言うまでもない。¹⁾ パーソンズもまたヘンダーソンのパレート解釈に大きな影響を受けた研究者の一人であった。²⁾ 本稿の目的はパレ

トの方法論に焦点を定め、それがヘンダーソンを経由していかにパーソンズに継承されたのかを明らかにすることにある。³⁾

パレートの方法論

思想史的位置づけ

パレートの方法論的立場をひとことで表現すれば「実証主義」である。ここで実証主義とは啓蒙思想、経験論、功利主義といった立場を継承し、これらに共通する理性主義、合理主義そして反形而上学的思想を総合しつつ、すでに確立されていた自然科学の方法論に基き社会科学を定式化せんとして登場した思想と運動を指すものとする。それは富永健一によれば、「十七世紀以来かがやかしい成功をおさめて科学的思考のルールを確立した自然科学の方法原理を、自然と区別された社会というもう一つの対象領域の問題にも延長して適用することができるしまたそうすることが必要である」と考える立場であった。⁴⁾

発生期の社会科学は明らかに人文学ではなく自然科学をモデルとして出発した。人文学と自然科

1) ここで方法論とは、パーソンズにならって科学的命題の妥当性に関する一般的根拠、すなわち観察や検証が行われる手続き、命題や概念の定式化および結論の演繹に関する手続きの妥当性などを意味するものとする。(Parsons, T., *The Structure of Social Action*, New York: McGraw-Hill ed., 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、第一分冊、47-49頁)。

2) Parsons, T., *ibid.*, 1937年、邦訳、第一分冊、14頁。

3) 従来、パレートの社会学に関する研究は、そのほとんどがエリートの周流に焦点を定めており、方法論について体系的に記述したものはほとんど見いだすことができない。それではなぜ本稿においてパレートの方法論に注目するのかと言えば、それはまず第一に彼の方法論が草創期の社会学における実証主義の考え方を典型的に示しているからであり、第二に、パレートの場合、残基・派生体をはじめとする実質的理論と方法とが密接に関連しているからである。富永健一が指摘しているように、自然科学と人文学の谷間に後発の学問として成立した社会科学は、成立当初から固有の方法を持っていなかった。いきおい社会科学は、その方法を先行する自然科学と人文学から借用せざるをえなかったわけであるが、その結果、社会科学は当初より今日にいたるまで、なかば科学なかば人文学という中途半端な性格を宿命的に背負われることになった。(富永健一『現代の社会学者』講談社学術文庫、1993年、32頁)。M. ウェーバーやE. デュルケームといった草創期の社会(科)学の巨人たちが、方法論の問題と格闘せざるをえなかった理由はここにある。

4) 富永健一、前掲書、43頁。

学の谷間に後発の学問として成立した社会科学が、科学として確立されるためには、まさに科学そのものであった自然科学の論理と方法を追隨するほかに選択の余地が残されていなかったからである。だが社会科学が自然科学をモデルとしたのは、そのような社会科学の後発性により由来するものではなく、むしろ社会科学の側にこれを積極的に模倣しようとする気運が存在したがゆえと考えるべきであろう。というのも自然科学が体現する科学的思考こそ近代を前近代から截然と区別し、近代化と産業化を押し進め、結果として西洋の非西洋に対する優位を決定づけた思考上の革新であったからである。⁵⁾ 発生期の社会科学が自然科学にならない自らを経験科学化し、もって社会の近代化と産業化を主導する原理たらんとしたことは想像に難くない。自然科学で確立された実証主義的思考が社会的事象にも適用されえるまたされるべきであり、その結果獲得される実証的知識なしには産業社会としての社会進歩もありえないと主張したサン＝シモン (Saint-Simon) と A. コント (Auguste Comte) の実証哲学はこのことを如実に物語っている。⁶⁾

自然科学で有効であることが証明されている方法を社会諸科学に適用するという明確な意図を持って社会科学に参入したパレートが、⁷⁾ 上述の実証主義の系譜に連なるものであることは言うまでもない。青年時代にパレートはコントの実証哲学に大きな影響を受けたとされる。⁸⁾ しかしコントは実証主義の論理とイデオロギーこそ明確に示したものの、他方、「知識の三状態の法則」や「諸学科の百科全書的階梯」といった形而上学的考察を展開し、個別的な観察や実験からいかにして一般化された理論を導くのかに関する具体的方法に

ついては、ほとんど何も提示しなかった。これに対しパレートは、単に科学における経験の重要性を指摘するばかりでなく、数学や統計といった現代の実証科学に不可欠な一般化の用具を駆使して、経済学と社会学の実証科学化を実践したのである。

分析の準拠枠組

富永健一は実証主義を、彼が仮に古典的実証主義と呼ぶ19世紀的な形態と、同じく仮に新実証主義と呼ぶ20世紀的な形態に大別する。⁹⁾ パレートの方法論的立場が後者（すなわち論理実証主義）に近いものであることはパーソンズも指摘するところであるが、¹⁰⁾ 実際、彼の立場は、実証主義が前者から後者へ変貌を遂げる過渡期の形態として把握されるであろう。というのも彼の方法論には、論理実証主義の特徴とともに古典的な実証主義の特徴もまた色濃く残されているからである。そこで本稿では富永によって列挙された実証主義に関する六つの特徴、すなわち ① 認識における客観主義 ② 普遍化的経験主義 ③ 経験と理論の二元性 ④ 測定とデータ処理の科学的手続きの重視 ⑤ 科学一元論 ⑥ 科学的認識の価値・理念からの自由を準拠枠組として、¹¹⁾ パレートのそれを項目ごとに検討してゆくことにしよう。¹²⁾

認識における客観主義

まず第一に、実証主義的認識は客観的でなければならない。ここで客観的とは、認識者が誰でもあっても個人差なしに同一の結論に達するような普遍的認識が可能であるという相互感覚性・相互主観性の確保を意味している。このような意味で

5) 富永健一、同書、33頁。

6) 富永健一、同書、51-52頁。

7) Pareto, V., *Trattato di Sociologia Generale*: G. Barbéra, 1916. (*The Mind and Society. A Treatise on General Sociology*, Translated by Andrew Bongiorno and Arthur Livingston, New York: Harcourt Brace, 1935), § 6, § 20, § 50, § 68, § 69, § 110, § 118.

8) 松島敦茂『経済から社会へ—パレートの生涯と思想—』みすず書房、1985年、19頁。だが佐藤茂行は、パレートに対するコントの影響が自明視されていることに異議を唱え、コントの実証哲学はいわゆる経験論者に共通な考え方を示しているにすぎず、たとえこの点に関してコントとパレートの間に親近性が認められるとしても、認識論に関する限り、それをコントの影響とみなすわけにはゆかないと述べている。(佐藤茂行『イデオロギーと神話』木鐸社、1993年、51-52頁)。

9) 富永健一、前掲書、99頁。

10) Parsons, T., *ibid.*, 1937年、邦訳、第二分冊、79頁。

11) 富永健一、前掲書、100-102頁。

12) 多くの研究者が指摘するように、彼の議論は錯綜し、同じ内容の議論が形を変えて何度も繰り返される。しかも自らの立場を積極的に定義するのではなく、それが何でないかを述べる背理的な議論を展開するため、いっそう焦点が絞りにくい。しかし『一般社会学大綱』の第一章をテキストとしてその全体を俯瞰してみれば、そこに二つの主要な議論を看取することができる。ひとつは経験の重要性に関する議論であり、もう一つは価値判断の排除に関する議論である。

の客観性は、明確に定式化された手続きの遵守によって確保されるものであると考えられるが、社会科学においてこの意味での客観性を確保することは、実は容易なことではない。まず第一に理論や概念を高度に抽象化し、分析方法を単純化したとしても、実際の分析がいつも同じ結果を示すとは限らない。自然科学において追検証が容易であるのは、換言すれば、ある対象にある理論と方法を適用すれば、認識主体が誰であれ同じ結果を得ることができると期待できるのは、現象を構成する諸要素に等質性を仮定することが可能であり、それらは原因と結果を確定しうる比較的単純な法則に従って運動を繰り返していると前提できるからである。

社会科学においても理論を高度に抽象化および一般化すれば、「同一の対象に同一の理論と方法を用いることで、同一の結果を獲得する」こと、すなわち認識主体の個人差を理論と方法の遵守によって吸収することが、ある程度可能であるかもしれない。しかし複合性の高い社会的現象にそのような理論と方法を適用しても、自然科学と同じような水準での説明と予測を期待することはできない。パレートの展開した純粋経済学は、「最少の努力で最大の満足を得るために、目標に対してもっとも合理的な手段を選択する」と仮定されたホモ・エコノミクスの行動から生じる経済過程を、きわめて分析的に定式化したものであった。それは数学を駆使することで、理論体系から不確実な経験的要素を放逐しており、その意味で認識主体のバイアスを排除しうる分析用具であった。しかし彼にしても、結局そのような方法が現実の問題には無力であり、人間の非論理的な行為に関する研究である社会学によって補われなければならないことを確認したのである。¹³⁾

普遍化的経験主義

次に実証主義は、経験的世界の説明に際しいかなる形而上学の原理をも仮定せず、あくまでも経験的事実に基づいて仮説を設定し、その検証によって獲得された法則を用いてこれを実践せねばならない。この経験性、逆に言えば反形而上学の主張こそ古典的実証主義の時代から今日にいたるまで一貫して保持されてきた実証主義の中心テーゼにはかならない。ゆえにこの議論は、当然ながらパレートの方法論における一方の柱となっており、『社会学大綱』においても直接に¹⁴⁾ または形而上学批判という形で間接的に、¹⁵⁾ 繰り返し呈示されている。

a) 経験への準拠

パレートにおける経験性重視の姿勢には徹底したものがあつた。彼は経験に基づかない議論はすべて形而上学であると断定し、ドイツ観念論の集大成であるヘーゲル哲学は言うに及ばず、かつてはパレートに影響を与えたコントやスペンサーさえも、経験的領域を超えた議論を展開したという理由で厳しく批判した。¹⁶⁾

経験論の定祖と見なされるジョン・ロックは、『人間悟性論』において人間の悟性的能力はすべて経験の所産であり、生得的な能力ではないことを主張したが、¹⁷⁾ パレートはさらに進んで、純粋に記号の論理的形式を扱う学問と考えられている数学でさえも他の諸科学と同じように経験に基礎づけられており、公理や定理といったものも、実は人間の長い経験によって生み出された真理にすぎないと主張する。¹⁸⁾ 例えばパレートは、1890年のパンタレオーニに宛てた手紙の中で、「経験こそ至上のものであり、経験以外に真理の基準はありません。経験に合致した結論をもたらすものが真、経験に逆らう結論を導くものが偽であつて、

13) Freund, J., *PARETO, la théorie de l'équilibre*, Seghers, Paris, 1974. 『パレート均衡理論』小口信吉 板倉達文訳、文化書房博文社、1991年、46-50頁。

14) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 6, § 69, § 71, § 486. 「ここにわれわれは化学、物理学そして他の諸科学にならつて、純粋に実証的な社会学の展開を試みることにしよう。それゆえ以下のすべてにおいて、われわれは経験と観察だけをよりどころとする」。(§ 6)

15) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 19, § 20, § 21, § 91.

16) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 6, § 59, § 112, § 613, § 1537.

17) Locke, J., *An Essay concerning Human Understanding*, 1960, Clarendon Edition, ed by Peter H. Nidditch, Oxford: Clarendon Press, 1975, Book I. ロック, J. 『人間悟性論』上・下、加藤卯一郎訳、岩波文庫。

18) 松島敦茂、前掲書、1985年、19頁。佐藤茂行、前掲書、1993年、14頁。

実験的に検証されえないものは疑わしいということです……数学的公理は、限りない経験の積み重ねの要約にすぎません……私は、公理と称される原理から出発することには絶対反対です」と述べているが、¹⁹⁾ このような言動は、一見パレートのラディカルな経験主義者ではないかとの疑念さえ生じさせるほどである。

しかしながらパレートは、経験への準拠を熱心に説く一方で、観察や経験そのものが誤りを犯す可能性があることは理解していた。パレートは客観的現象と主観的現象、すなわち現象そのものとわれわれの主観によって捉えられた現象のイメージとを明確に区別すべきことを主張する。²⁰⁾ 彼によれば、われわれの主観は客観的世界を映し出す鏡のようなものであるが、²¹⁾ 水中に突き立てられた棒が折れ曲がって見えるように、主観に捉えられた現象のイメージは必ずしも現象そのものを正確に反映するわけではない。そこで主観と客観のこのような「ズレ」を補正する必要があるのであるが、それを可能とするのが論理-実験的方法を用いることによって獲得される客観的知識であるとされるのである。²²⁾

b) 認識論的実在論

パレートが決してラディカルな経験主義者ではないにしても、彼は経験の重要性を強調するに急なあまり、経験の理論依存性、すなわち経験そのものが、われわれの主観に存する理論や概念を前提としなければ成立しないという点を明確にしえなかったように思われる。この点でウェーバーは

体験と経験とを明確に区別し、体験は一般的諸概念に関係づけられてはじめて経験となること、したがって経験はそれ自体、決して生のものではありません、概念図式によって選択的に知覚され、ひとつの意味を持ったまとまりとして構成されたものであることを正しく指摘した。²³⁾

ここでこの問題にこだわるのは、パレートにおけるこの種の視点の欠如は、単に彼がそれを看過したというより、むしろ彼の認識論に由来する必然的結果と考えられるからである。というのも、パレートによれば「言葉はどのようなものであれ、われわれには何ら重要ではなく、単に事物の跡をたどるためのラベルにすぎない」のであり、²⁴⁾ ゆえに、たとえ事物を指示する言葉が失われてしまったとしても、事物が言葉とともに消えてしまうわけではないと考えられているからである。このような、われわれの思惟や観念からは独立して存在する事物を前提し、言語をはじめとする記号を、それらに貼りつけられる単なる符丁とみなす認識論的実在論の立場からは、我々の主観的な言語的分節化が、認識対象としての世界を創造するといった観念論的・構成主義的視点は出てこない。パレートが記号としての言語の恣意性、すなわち「記号表現と記号内容の対応の恣意性」についての議論を展開したにもかかわらず、²⁵⁾ 記号の恣意性が内包する二番目の意味である、記号による「対象世界の分節化に関する恣意性」に論及しえなかった理由はここにある。²⁶⁾

c) 存在論的唯名論

19) 佐藤茂行、同書、1993年、14-15頁。

20) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 94, § 95.

21) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 1778 n.1.

22) 佐藤茂行、前掲書、1993年、22-23頁。

23) Parsons, T., *op. cit.*, 1937年、邦訳、第四分冊、178頁。

24) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 119.

25) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 118.

26) 「記号表現と記号内容の対応の恣意性」とは、記号の外形と意味の結びつきに必然的な理由がないことを言う。たとえば日本でイヌと呼ばれる動物は、イヌと呼ばれなければならない必然的な理由はない。それはドッグ（英）でもフント（独）でもよいし、あるいはヌイと呼ばれてもかまわない。これに対し記号による「対象世界の分節化に関する恣意性」とは、語義による世界の分節化に必然的なルールが存在しないことを言う。たとえば英語では「川」を大きさによって<river - stream>に分けるが、フランス語では海に注ぐか注がないかで<fleuve - rivière>に分節化する。従っていくら大きな川でも湖に流れ込んだり、他の川の支流である場合にはrivièreと表現されるわけである。後者の意味での恣意性の主張が、言語記号による指向対象の創造という観念を含意していることは言うまでもない。(Culler, J., *Saussure*, Fontana Press, 1976. J. カラー『ソシュール』川本茂雄訳、岩波書店、1978年、30-31頁。丸山圭三郎『文化のフェティシズム』勁草書房、1984年、第三章)。

パレートの記号観に関連して、もうひとつ触れておかねばならないことがある。それは彼が以上のような記号観に基づいて、理論を認識のために恣意的に構成された有益な虚構と考えたことである。²⁷⁾ パレートによれば、一般的諸原理、すなわち理論は事実を描写するために考案された単なる抽象観念であるにすぎない。したがってそれは現実のさまざまな局面を捨象することによって成立したものであるから、そのような観念と正確に対応する事象は実在しないというわけである。しかしこの論理には少々無理がある。というのは、抽象化または一般化は、多かれ少なかれ、われわれが記号を用いて事物を表象するかぎり必然的に生じる現象であり、²⁸⁾ もしそのことが虚構性の根拠となるなら、理論的命題のみならず、何らかの記号で表象されるわれわれの命題は、すべて虚構であることになってしまうだろう。

パレートは事実をこえたどのような概念的実体をも前提しないという意味では確かに唯名論者であるのかもしれない。だが、概念と実在との対応という点に関しては、彼はウェーバーとは異なり両者の対応を否定しないのであるから、自らを唯名論者中の唯名論者と称して理論の虚構性を主張するのはあたらない。彼が概念と実在との一致を前提としていたことは、論理-実験科学においては厳密に事物と一致する用語が用いられなければならない、²⁹⁾ 曖昧で不正確な言葉を用いた議論は無意味であるとする彼の主張³⁰⁾によって裏付けられる。そもそも概念が指示物を持つことを前提とせねば、実証主義の根幹である仮説命題の経験による検証は不可能であろう。

おそらくパレートが理論の虚構性を主張したのは、まず第一に、記号の意味は存在しても指示物は存在しない言葉や概念を用い、壮大な意味の構築物を創り上げる形而上学に反対する立場から、第二に、あらゆる実体概念を否定し、事象を構成する諸部分の相互関係を把握することによって、

事象をより動態的かつ関数的に認識しようとする(本源的)機能主義の立場から、いわゆる「言葉による非在の現前」とその実体化を徹底して批判しようとしたからに違いない。パレートには、経済学者や社会学者は基本的にこのことを理解しておらず、今なお指示物ではなく記号そのものに第一義的な関心を払い、その意味の解明に没頭しているように思われた。³¹⁾ 言葉ではなく事象そのものに関心を払うこと、これこそ社会科学が形而上学を払拭し、実証科学化するために断行せねばならない第一歩であるとパレートは考えたのである。

d) 経験から理論へ

パレートにとって科学とは、基本的に仮説-検証-演繹という過程の反復と考えられていた。すなわち、まず経験的事実に関する注意深い観察から仮説命題を導き、これを肯定的事実によって検証することによって法則化する。次に、こうして得られた法則に基づいて仮説命題を演繹し、再びこれを事実によって検証するという手続きの繰り返しである。これらの手続きに関するパレートの議論は必ずしも明瞭ではないが、それは「あらゆる理論の真偽は仮説構成の手続きではなく検証に由来する」ものであり、「仮説そのものはいかなる手続きによって立てられてもよい」という主張によって特徴づけられる。³²⁾

唯名論の主張に関する議論の中で触れたように、パレートにとって理論とは、「事実を描き出すために創りだされた抽象観念」にすぎない。しかも「事実を同じようにうまく表現しているという意味で、真と見なされるさまざまな理論が存在している」のであり、「それらのなかからどの理論を選ぶかは、一定の制限内では恣意的である」と考えられていた。³³⁾ すなわち彼にとって理論とは、事象の説明と予測にとって有効であるという条件以外には、どのような制約も受けることもなく、まったく恣意的に構成しうる仮説命題を意味して

27) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 64.

28) 池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書、1984年、88-94頁。

29) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 11, § 69, § 108, § 119.

30) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 27, § 42.

31) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 118.

32) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 2397.

33) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 64.

いるのである。これに対して検証は、これらの恣意的に立てられた複数の理論から、真に有効な理論を選び分けるための決定的に重要な手続きと考えられた。

以上のような、一方で、仮説命題の自由な定立を保障することで理論の創造性を確保し、他方、検証によってその規約性を制限しようとする構図は、すでに検討したヘンダーソンの概念図式のそれと同じである。それはまた法則定立の源泉を観察からの帰納に限定しない点において、ヘンダーソン同様「洗練された帰納主義」と呼びうる立場であると言えよう。

だが仮説構成の手続きを限定しないとはいっても、パレート自身が主に伝統的な帰納の原理に依拠していたことは明らかであるように思われる。パレートは自らの立場を論理-実験的(logico-experimental)と呼ぶが、³⁴⁾ 彼によればこの論理-実験的科学は、「法則」すなわち「諸事実のあいだに看取される斉一性」の探求を目的とする。³⁵⁾ そしてこの目的のために実行されるべき「最初の努力は、社会的事実を分類すること」であり、「われわれが似通った事実の分類を終えたとき、そこからの帰納によっていくつかの斉一性が浮び上がってくる」、³⁶⁾ という彼の言明には明らかに帰納の原理が看取される。

ところで帰納とは、本来、有限個の単称命題からひとつの普遍命題を導く推論過程を指すのであるが、この原理が論理的にも経験的に正当化されえず、常に蓋然的推理にとどまらざるをえないも

のであることは周知の事実である。³⁷⁾ この問題を回避するひとつの方法として、個々の観察言明から普遍命題を導くのではなく、確率的真理を主張するにとどめるという方法がある。³⁸⁾ パレートが帰納的推理によっては全称命題を導き得ないという、いわゆる帰納の問題を明確に意識していたかどうかは定かではない。しかし彼は、「われわれのなすあらゆる探求は偶然的かつ相対的であり、多かれ少なかれ蓋然的で、せいぜい非常に確率の高い結果を生み出しているにすぎない」として、³⁹⁾ 科学的真理の蓋然性を主張し、結果的にこの問題を回避した。それはある意味で、パレートが普遍的命題を導き得ない帰納の原理に依拠したことの必然の結果として考えることもできるだろう。

e) 科学的認識の相対性

だがわれわれは、パレートにおける科学的真理の蓋然性の主張は、基本的にこのような推論上の問題に加えて、論理-実験的領域には「絶対ということはありません」とする、⁴⁰⁾ 科学的認識の相対性の観念に基づいてなされたものと考えべきであろう。

パレートによれば、たとえ具体的現象といえども、そのすべてを完全に認識することは不可能であり、したがっていかなる認識も、ある部分についての近似的な認識であるにすぎないと考えられる。⁴¹⁾ それゆえわれわれは、まず具体的現象の全体をおおまかに捉え、しかるのちこれに漸次的に接近してゆくことで、近似の度合いを高めてゆ

34) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 12.

35) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 69, § 84, § 86, § 87, § 96, § 97, § 99, § 101, § 140, § 141, § 144.

36) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 144.

37) 帰納の原理は論理的に正当化されえない。なぜなら推論の前提に関する真理性を保証することができないからである。たとえば百万羽のカラスを観察したところ、すべてのカラスの羽根が黒かったので「すべてのカラスは黒い」と推論することは妥当である。にもかかわらず百万一羽目のカラスの羽根が黒でない可能性を否定することはできない。次に帰納の原理は経験的にも正当化することができない。なぜなら、今まで帰納の原理に基づいて導かれた推論が経験的に妥当であるように思われ、かつ実践的にも非常にうまく機能してきたと仮定しよう。だがそのことをもって帰納の原理を正当化しようすることは、帰納的推論を正当化するために帰納的推論を用いるというトートロジーに陥ってしまうからである。(Chalmers, A.F., *What is this called Science?*, University of Queensland Press, 1979. A. F. チャルマーズ『科学論の展開』高田紀代志・佐野正博訳、恒星社厚生閣、1983年、第二章)。

38) たとえ何百万羽の黒いカラスを観察しようとも、そこから「すべてのカラスは黒い」と断言することはできないが、「次に出会うカラスも黒い確率はかなり高い」と述べることは可能である。確率的真理の主張は、ある種の修正または後退であるとみなされるが、少なくとも帰納の原理につきまとう、有限個の単称命題から普遍命題を導くために必要な論理的飛躍に関する問題を回避することが可能となる。

39) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 29, § 69, § 97.

40) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 108.

41) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 106.

く努力を続けなければならない。これをパレートは「連続的近似の原理 (successive approximations)」と呼ぶ。⁴²⁾ そしてそのためには全体をいくつかの部分に分割し、次にそれらの部分についての斉一性を把握するという分析的手法を用いねばならないが、⁴³⁾ 逆に、そのようにして得られた理論は、具体的現象のある部分について把握された斉一性にすぎないのであるから、全体の説明にあたっては、それらの諸理論を総合し、説明を補完しあうことが必要となる。⁴⁴⁾

さて、繰り返し述べたように、パレートにとって理論とは、事実を描写するために考案された単なる抽象であり、事実と一致するかぎりにおいて受け入れられ、不一致が生じるやいなや廃棄される仮説にすぎない。⁴⁵⁾ ここでパレートが理論は仮説に過ぎないと述べるとき、われわれはそこに、たとえ経験的に検証された理論であっても、決してその絶対的な真理性を主張することはできないとする、反証主義的含意が存在していることに留意せねばならない。⁴⁶⁾ 科学は本質的に絶対的認識ではなく、細部への連続的な近似を繰り返すことによって客観的現実に接近してゆく営み以外のものではありえない。そしてまた、こうした努力によってこそ科学は累積的に進歩、発展することができるのである。⁴⁷⁾ 以上のような科学的言明の近似性、連続的近似の原理、分析と総合の方法、仮説としての理論、科学の累積的進歩といった科学観が、いずれも科学的認識の相対性という観念で一貫していることは明白であろう。

経験と論理の二元性

第三に、実証主義は経験を重視し、形而上学的思弁の排除を主張する点では経験主義と同じであ

るが、他方、数学や論理学によるア・プリオリな推論規則に基づく演繹をも命題の定立に不可欠な要素と考える点において、経験主義とは区別される。そして論理実証主義は、単に経験とは無関係の論理的推論の役割を重視するのみならず、論理分析の方法を用いて命題の論理的整合性や相互主観的な理解可能性を厳密に吟味する点で、それ以前の実証主義と区別される。

ここで決定的に重要であるのは、経験主義と実証主義とを区別する基準となる「経験と無関係な論理的推論」であるが、富永健一によればそれは次のような意味である。例えば、「すべての人間は死ぬ (大前提)」、「ソクラテスは人間である (小前提)」、「ゆえに「ソクラテスは死ぬ (結論)」という有名な三段論法において、大前提と小前提の真偽は経験的事実に依存するが、そこから演繹された「ソクラテスは死ぬ」という結論の真偽は経験的事実に依存しない。なぜならこの結論は、その推論形式の形式そのもののゆえに真となるのであって、経験的事実と一致するがゆえに真となるのではないからである。今、仮に「人」を α 、「死ぬ」を β 、「ソクラテス」を x で表現してみよう。するとこの三段論法は「すべての α が β であり、 x が α の一つの要素であるなら、 x はまた β の一つである ($\alpha = \beta, x \in \alpha, \therefore x \in \beta$)」という命題としてあらわされる。この命題は常に真であるが、それが真であることは経験的事実ではなく、論理的な規則に基づく演算だけで判定されうるのである。⁴⁸⁾

すでに述べたように、公理さえも繰り返される経験の所産と考えるパレートの徹底した経験主義の主張からは、経験のみならずア・プリオリな論理的推論を重視する視点は出てこないように思わ

42) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 69, § 105, § 106.

43) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 30, § 32.

44) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 33, § 34, § 39.

45) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 52, § 55, § 63.

46) 科学理論はそれが事実と一致する限りにおいて受容され、不一致が生じるやいなや廃棄される仮説にすぎないとして (Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 52, § 55, § 63.)、理論の絶対的な真理性を主張しない点、検証されるべき仮説はいかなる手続きによって形成されてもよく、その真偽は仮説構成の手続きではなく仮説の検証に由来すると考える点 (Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 2397.)、さらには仮説は必ず検証が可能でなければならないとする点において (Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 11, § 44.)、パレートは反証主義に似た見解を示す。しかし反証主義があくまで観察言明による命題の偽の確定を中心原理とする以上、確証に焦点を置くパレートを反証主義の先駆者と考えることには無理がある。

47) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 106, § 144.

48) 富永健一、前掲書、143-144頁。

れる。だが、一定の公理からきわめて分析的に演繹された、数理的な経済学理論を想起すれば、彼が単なる経験主義者でないことは容易に理解できよう。

また『社会学大綱』において、命題中の特定の文字列をアルファベットや序数へ置き換えようとするパレートの試みは、同様に文字列を記号で置き換え、命題から経験的要素を排除して、代数方程式のような不特定の要素間の関係を示す論理的形式を取りだそうとする論理分析の手法に似ている。もちろんパレートは論理実証主義者のように厳密な命題の論理分析を行ったわけではなく、単に特定の言葉が喚起する感情や、その言葉の日常的意味が内包する漠然性や多義性を払拭する手段としてこれを提起したにすぎない。しかしパレートが実際に特定のキーワードを記号に置き換え、その結果命題が説得力を失ってしまうか否かを判定しようと試みるとき、そこで彼が論理実証主義者と同じように、主として命題の論理的整合性や理解可能性を問題としていることは明らかである。⁴⁹⁾ また自らの方法論的立場に与えられた論理—実験的という呼称が、論理整合的かつ演繹的に立てられた仮説命題の、⁵⁰⁾ 経験的検証を重視する立場を意味することは言うまでもない。

測定とデータ処理

四番目に、実証主義は仮説命題を設定し、これを経験的に検証することを基本原理とするが、その際、命題を構成する諸概念が経験的に測定可能であり、また測定によって得られたデータが科学的に処理可能であることを要請する。おそらくパレートは、もっとも早くから社会科学の数量化を志した研究者のひとりである。彼の計量経済学や理論経済学の業績は、まさしくこのような方針に従ったものであるし、「政治経済学は純粋経済学において——少なくとも理論においては計量的な

学問となった。社会学に關してもわれわれは出来るかぎり質的な考察を量的なそれに置き換えることができるように努力するつもりである」という言明に明らかなように、⁵¹⁾ 当初、彼は社会システムの分析においても経済システムの分析で用いたような、数学的システム分析の適用を考えていた。⁵²⁾

だが結果的にパレートは、結局、現段階では社会システムを構成する諸変数の作用のありかたを数量化し、それらの相互依存関係を方程式の形で記述することは不可能であるとしてこれを放棄した。そして彼はそれに代る次善の方法として「相互依存の循環の方法」と呼ばれる分析手法を提起した。それは社会システムの均衡に影響を与える数多くの要素のうち、(a) 残基 (b) 利益 (c) 派生物 (d) 社会の異質性とエリートの周流という四つの要素にのみ注目し、まず最初に、ある条件のもとで、これら四つの要素のそれぞれが、他の三つの要素に対してどのような影響を与えるかという〈直接効果〉の分析を行い、しかるのちこれらの〈直接効果〉を結びあわせ、〈波及効果〉の連鎖を分析するというものであった。⁵³⁾ この分析方法については次稿でパレートの社会システム論を考察する際、詳細に検討することにしよう。

科学的一元論

五番目に、実証主義は社会科学であれ自然科学であれ、両者が科学たることに關して原則的な違いは何もないとする科学一元論の立場をとる。もちろんこの場合、科学的一元論とは自然科学の方法論による社会科学の基礎づけを意味し、両者の総合を意味するものではない。化学や物理学を、とりわけ力学をモデルとして社会科学の構築を目指すパレートが、方法論的に自然科学的一元論を想定していたことは言うまでもない。パレートの場合、この科学的一元論がもっとも顕著に示され

49) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 116, § 119.

50) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 42.

51) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 144.

52) 数学的システム分析の手法とは次のような方法である。まず現象を生じさせる諸変数の中から目的に従っていくつかの変数を選定し、相互依存的なシステムとして概念化する。次にこれらの諸変数の関係を記述する方程式を変数の数だけ導き、連立方程式（望ましいのは瞬間の変化量を記述する連立微分方程式）として定式化する。そして所与の条件のもとで連立方程式を解くことによって当該システムの均衡点を決定する。

53) 松島敦茂、前掲書、1985年、77頁。

るのは彼の法則観においてである。彼は「科学的法則とは実験的斉一性にすぎない」ものと考えたが、さらに「この観点からすれば政治経済学または社会学の法則と、他の諸科学の法則の間にはどのような差異も存在しない」と主張した。⁵⁴⁾ そしてそれらの理論が異なったもののように見えるのは、「さまざまな法則の影響がからみあう複雑性」が異なるからであり、かつ「それらの影響を孤立化することができる度合い」が、すなわち変数を統制して実験する可能性が異なるからである。⁵⁵⁾ すなわち、それらはいずれも対象の実在レベルにおける相違から生じるものであり、科学の論理に関しては、いかなる科学といえども共通であるというのがパレートの結論であった。おそらく草創期の社会学者のなかで、科学的一元論をもっとも明確に述べたのはパレートであろう。

科学的認識の価値・理念からの自由

最後に、実証主義は社会的事象についても原則的に事実判断と価値判断を分離することが可能であり、後者は社会科学上の言明から排除されねばならないと考える。パレートの方法論において価値判断排除の問題は、普遍化的経験主義の議論と並ぶ、もう一方の柱である。研究対象の選択に関する価値関係の問題を除き、自然科学ではほとんど問題とならない認識と価値の問題は、単なる方法論の問題にとどまらず、『社会学大綱』の主要なテーマの一つであるイデオロギーの問題と分かち難く結びついている。本稿の冒頭部分の脚注でパレートの方法論に関する議論と、実質的理論とが密接に関連していると述べたのはこの意味においてである。

a) 価値判断の排除

すでに述べたように論理－実験科学は事象の認識にのみかわり、諸事実間の斉一性、すなわち法則の探求を目的とする。したがってそれらの理

論および命題は、もっぱら真偽の判断に関与する認知的規準によって判断されなければならない。ところがパレートによれば、政治経済学や社会学においては、それらが人間行為に影響を及ぼすことを企図する実践的学問であるがゆえに、事実からの論理的推論を補足しながら、主に感情に訴えるということが盛んに行われてきた。⁵⁶⁾ なぜなら、社会科学上の理論は一般にそれが「真理である」、すなわち経験と一致するがゆえに主張され受容されるのではなく、おうおうにしてそれが人々の「感情」、または「利害」と一致するがゆえに主張され受入れられるからである。そのような場合、本来、人々は「その理論は私の利益と一致する」、「その理論は道徳的に好ましい」、「その理論は感じがいい」などと述べるべきであるのだが、たいいていの場合、人々は単に「その理論は真理である」と表現する。⁵⁷⁾ もちろんここでパレートが問題にしているのは、単なる言葉の表現の問題ではなく、その表現が象徴している事実判断と価値判断の混同である。科学における真偽判断は、評価的および情緒的判断と明確に区別されねばならない。パレートが非論理－実験的領域において「真である」ことは、経験との一致ではなく感情との一致を意味すると述べるとき、⁵⁸⁾ この感情という言葉は単に意識化された感覚としての情動・気分のみならず、明確に意識された価値をも指示していると考えてよいであろう。

以上のことから、この認識における感情の排除に関する議論が、実は科学における唯一の判断規準としての認知的規準 (cognitive standards) とそれ以外の評価的規準 (evaluative standards) および情緒的規準 (affective standards) とを明確に区別し、科学的判断において後者を排除しようとする価値判断排除の議論であることは明らかである。もっともパレートは、認識から価値判断を排除する方法については、研究室では厳密な実験科学の方法に従い、研究室を離ればカトリックの信仰に従ったパスツールにふれ、われわれは

54) Pareto, V., *op.cit.*, 1916, § 99.

55) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 99, § 100.

56) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 76, § 77.

57) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 14.

58) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 14.

自らを二つに分け、研究の場においては価値を「離れ、没する」ことが可能であると指摘する以外に何も述べていない。⁵⁹⁾ したがって価値判断の排除を主張する点では同じであるが、パレートにはウェーバーの価値自由のような観点、すなわち人間にとって価値判断は不可避であること、それゆえにこそ自らがよって立つ価値理念を自覚し、対象化および相対化することでこれを統制しようとする、より積極的な姿勢を見出しえない。パレートが科学的な判断から評価的、情緒的判断を排除すべきことを繰り返し唱え、⁶⁰⁾ その実践を試みたにもかかわらず、これを達成しえなかった原因は、なによりも問題の自覚以外に何も方法論を準備しなかったことに求められよう。

b) 社会科学の分析方法

だがこの社会科学における認識と価値判断の問題は、パレートを社会学的命題の分析方法における多元性の議論へ導いた。パレートによれば、理論は次の三つの観点から考察されねばならない。⁶¹⁾ まず理論は客観的局面において考察されねばならない。すなわち理論および命題は、それらを主張する人やそれに同意する人とは関係なく、「単に経験と一致するか否か」という点から考察されねばならない。これは理論の「実証的分析」と呼んでよいであろう。

次に理論は客観的局面のみならず、主観的観点からも考察されねばならない。すなわち理論は「なぜある人は $A=B$ と主張するのか」について、それを主張する人や受入れる人との関連で考察されねばならない。この分析は、その原因を心理的、社会的、文化的レヴェルのいずれのレヴェルに求めるかでまったく様相を異にする。しかし、もしその原因を社会レヴェルの変数に、とりわけその命題を主張する個人の利害関心に求める場合、この分析は「知識社会学的分析」となる。

最後にパレートは、理論は効用の局面において考察されねばならないと主張する。すなわち「 $A=B$ という命題に反映されている感情が、それを

主張する人または受容する人にとってどのような利益を持つのか」が問われなければならない。この問いは、もし主張される命題とそれがもたらす利益とを結びつけ、その命題のイデオロギー性を暴くという方向に進むなら、さきほど述べた知識社会学的分析となり、他方、個人または集団に対するその命題の効用を、研究者の視点から客観的に評価するという方向へ進んだ場合は「機能的分析」となる。

以上のようにパレートは、社会科学の命題は実証的、知識社会学的、機能的という三つの位相において分析されねばならないと主張する。重要な点は、パレートが自然科学をモデルとする実証的科学としての社会学の定式化を宣言しながら、同時にその分析は知識社会学的分析と機能主義的分析によって補われねばならないと考えたことである。自然科学のように、客体の主観的意味や、認識の主体と客体の交互作用を考慮する必要のない場合は、純粋に認知的な態度で研究をすすめればよい。だが社会科学上の事象のように、われわれの主観的意味づけ、すなわち当為に関する意識が事象を変化させる可能性を排除できない領域では、分析対象としての命題に絶えず価値評価的要素が混入する可能性がある。このような命題を単に認知的規準で判断しても無意味であろう。それらの命題はその中に含まれる価値の実現を目的としており、その経験的な妥当性は問題とならないからである。

パレートが科学的認識から価値判断を排除すべきことを強調していることは確かであるが、しかし彼は決して価値判断そのものを否定したわけではない。ウェーバーほど明確に価値判断の必然性を擁護したわけではないが、少なくともパレートは真理と効用を注意深く区別し、命題が真理であるから有効である、または偽であるから有害であるといった関係は成立しないことを繰り返し述べている。⁶²⁾

命題の真理と効用がまったく異なった次元に属する議論であり、両者は厳密に区別されねばなら

59) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 142.

60) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 79, § 80, § 87.

61) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 13, § 14.

62) Pareto, V., *ibid.*, 1916, § 14, § 72, § 73.

ないことを明確に主張したことから、価値評価的な言明に関する機能主義的な分析の必要性を述べるパレートの口調は比較的穏やかである。それに對し命題のイデオロギー性を暴露し、その相対化を試みる知識社会学的分析はシニカルな口調で展開される。人は理性ではなく利益と感情によって行動する。したがってそれらの行動や主張に事後的に付け加えられる論理は正当化のための疑似論理であるにすぎない。現実の正しい認識にいたるには、まず命題を覆っているイデオロギー的外被を剥ぎとらなければならない。実際のところ、パレートの大著『社会学大綱』の目的の一つは、このような非論理的行為の非論理性を覆い隠す論理的うわ葉を取り除くことであった。⁶³⁾ 逆に言えば、機能主義的分析方法の必要性を語るときの穏やかさは、それが同書におけるパレートの直接的な関心ではないことの裏返しでもあろう。

ヘンダーソンとパーソンズによる継承

a) ヘンダーソンによる継承

本稿の冒頭で述べた通り、ヘンダーソンによるパレートの紹介と啓蒙は、主にパレートの方法論に限られたものであった。その理由はヘンダーソンの社会学に関する知識が乏しかったこともあるが、何よりもパレートの方法論に魅了されたせいであろう。ヘンダーソンの方法論に関しては、すでに詳細に検討したとおりであり、⁶⁴⁾ ここでそれを繰り返すことはしない。だが彼の方法論を本稿で明らかにしたパレートのそれと比較すれば、両者がきわめて類似したものであることは一目瞭然である。おそらく両者の根本的な類似は、彼らが等しく数学的なシステム分析の手法を用いて研究を進めた点にあるだろう。ヘンダーソンが、社会科学の領域に数学的なシステム分析を持込んだパレートの方法論に魅了されたことは、彼が書いた

パレートの入門書である『パレートの一般社会学』において、システムおよび社会システム概念の説明にかなりの分量があてられていることから明らかである。⁶⁵⁾ また科学方法論についても、事象の綿密な観察および経験的検証の重視、仮説としての理論、概念の実体化批判、科学的言明の近似性と蓋然性、明瞭かつ正確な言葉の使用、文字列の記号による置き換えなど、両者には著しい類似が見られる。もっともヘンダーソンの方法論が体系的に呈示されている『具体社会学入門』が書き上げられたのは、彼がパレートを読んでから約15年後であるから、その間にヘンダーソンが、パレートの方法論を積極的に取入れたと考えれば、そのような類似はむしろ当然と言えるかもしれない。

おそらく方法論に関する彼らの唯一の相違は、パレートが経験や事実の理論依存性を明確にしえなかったのに対し、ヘンダーソンが概念図式論を展開することによって、経験や事実の主観的構成および理論依存性を強調したことである。もちろんこれ以外にも細かな点でいくつかの違いを指摘できるだろうが、それらに重要な意味を見出すことはないだろう。

b) パーソンズによる継承

パーソンズの分析的実在主義と称する方法論的立場については前号で詳細に検討したとおりである。⁶⁶⁾ それは経験主義批判をベースとして、研究者の主観において構成される一般的かつ抽象的な概念による実在の再構成を強調するものであることから、はた目には経験を重視する実証主義とは対立する立場であるかのように感じられる。しかしパーソンズの真意は、経験主義者によって不当に貶下された理論の地位を回復し、実証主義方法論の中に適切に位置づけることにあった。従ってそれは理論を重視することによって、逆に経験的

63) 松島敦茂、前掲書、1985年、70頁。

64) 赤坂真人「社会システム論の系譜(Ⅱ) —社会学者としてのヘンダーソン—」 関西学院大学社会学部紀要、No.69、1994年。

65) Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937. L. J. ヘンダーソン『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』組織行動研究会訳、東洋書店、1975年。

66) 赤坂真人「社会システム論の系譜(Ⅲ) —ヘンダーソンとパーソンズ; 科学方法論をめぐる—」 関西学院大学社会学部紀要、No.71、1994年。

事実の重要性を貶下しようとする試みなどではなく、ややもすれば経験の側に偏りがちな実証主義を理論の側へ引き戻すことによって、両者とともに実証科学の不可欠な要件として定式化しようとする試みであった。

すでに述べたように分析的実在主義は、主観において合理的に構成された抽象的概念でもって実在を再構成する営みとして科学を捉ええる構成主義的指向をひとつの特徴とする。ここで概念と実在との関係が問題となるのだが、この点に関してパレートはウェーバー同様に批判されねばならなかった。なぜなら彼らはともに理論や概念の非実在性を強調し、とりわけパレートはそれらの抽象性を虚構であることの根拠としたからである。⁶⁷⁾これに対しパーソンズは、理論や概念の抽象性を弱点ではなく、むしろわれわれの思考を統御する絶好の武器としてきわめてポジティブに捉ええ、さらに概念の抽象性は必ずしもそれが虚構であることを意味しないと主張したのであった。

パーソンズはウェーバーの方法論に詳細な検討を加えた後、最終的に「基本的で論理的な諸点については、自然科学と社会科学の間に差異はない」との結論を導き、⁶⁸⁾パレート同様、自然科学と社会科学は、少なくとも論理の点においては同じであるとする科学的一元論の立場を明示した。⁶⁹⁾

パーソンズによれば、社会的行為の構造の中で取り上げた研究者のなかで、もっとも明瞭に科学的一元論を主張したのはパレートであった。すなわち「パレートは自然科学と社会科学の別を問わず、あらゆる経験的説明の科学に共通する一般的な方法論的輪郭を提示した」のである。⁷⁰⁾おそら

く方法論に限って言えば、パーソンズがパレートから継承したものは、この自然科学をモデルとする実証主義的な科学の論理であろう。この実証科学の論理をパレート、ヘンダーソンそしてパーソンズが共有したことは疑いえない。このことはパーソンズが、彼の科学と科学における理論の役割についての考え方に影響を与えた人物としてヘンダーソンとパレートを挙げていることから明らかである。⁷¹⁾

ところでパレートとヘンダーソンからパーソンズへ継承された、もう一つの重要なテーマがある。それは分析視角および分析手法としてのシステム論である。すでに述べたように、システムとは実体概念を否定し、事象をそれを構成する諸部分の相互関係において把握しようとする、19世紀後半に科学、哲学、芸術の各領域で有力となった(本源的)機能主義によって準備された概念であった。パレートそしてヘンダーソンは、まさにこの思想的潮流を経済学と生命科学の領域で体現した研究者であったと言えるだろう。もちろんパレートとヘンダーソンからシステム的アプローチを継承したパーソンズも、間接的ながらこの潮流に連なるものと考えてよい。この問題については次稿で詳細に検討することにしよう。(以下次号)

文献

- Aron, R., *Main Currents in Sociological Thought II*, Basic Books Inc., 1967. レイモン・アロン『社会学的思想の流れⅡ』北川隆吉・宮島喬・川崎嘉元・帯刀治訳、法政大学出版局、1984年。
- Ayer, A. J., *Language, Truth and Logic*, Revised Edition, Victor Gollancz Ltd., London, 1946. A. J. エ

67) Pareto, V., *op. cit.*, 1916, § 64. Parsons, T., *op. cit.*, 1937 年、邦訳、第四分冊、200 頁。

68) Parsons, T., *ibid.*, 1937 年、邦訳、第四分冊、168-169 頁。

69) パーソンズによれば、ウェーバーは人間行為における規則性の欠如および直接的な意味理解の可能性を根拠として、一般的な理論的諸概念の必要性を否定する歴史主義を批判し、いずれの科学も一般的な諸概念の体系を含まなければ論理的な証明は不可能であることを論証した。そしてこの批判の過程においてウェーバーは自然科学と社会科学の裂け目を架橋する方向へと突き進み、結果的に実証主義を基盤とする方法論と収斂する立場を形成したのであった。だが、にもかかわらずウェーバーは「二つの科学に関するリッケルトの区別を踏襲しながら不安定で中途半端な地点で立ち止まろうと」して、「二つの科学グループの間にあまりに硬直的な方法論的区分を行おうとした」がゆえに、結局、「純粋に論理的側面においては二つの科学の間にいかなる相違もないという見解にまで到達」することができなかった。(Parsons, T., *ibid.*, 1937 年、邦訳、第四分冊、182-232 頁)。

70) Parsons, T., *ibid.*, 1937 年、邦訳、第四分冊、182-183 頁。

71) Parsons, T., "An Approach to Psychological Theory in terms of the Theory of Action," Koch Sigmund (ed.), *PSYCHOLOGY*, 1959, p. 625. ちなみに、ここでパーソンズは、彼の科学と科学における理論の役割についての考え方に、もっとも重要な影響を与えた人物として A. N. ホワイトヘッドを筆頭に、L. J. ヘンダーソン、J. B. コナント、W. B. キャノン、V. パレートそして M. ウェーバーを挙げている。

- イヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳、岩波書店、1955年。
- Barber, B., L. J. *Henderson On The Social System: Selected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1975.
- Bernes, H. E. and Becker, H., *Social Thought from Lore to Sciences*, Harren Press, Washington, 1952, Vol. II, Chap. XXV: "Sociology in Italy. The Marx of Fascism: Pareto".
- Bellamy, R., *Modern Italian Social Theory: Ideology and Politics from Pareto to the Present*, Cambridge: Polity Press in association with Blackwell, 1987.
- Blaug, Mark (ed.), *Vilfredo Pareto (1848–1923)* Aldershot, Hants, England: Brookfield, Vt., U.S.A.: E. Wlgarpub., 1992.
- Bousquet, G. H., *The Work of Vilfredo Pareto*, Sociological Press, Minneapolis, 1928.
- Chalmers, A. F., *What is this called Science?*, University of Queensland Press, 1979. A. F. チャルマーズ『科学論の展開』高田紀代志・佐野正博訳、恒星社厚生閣、1983年。
- Creedy, F., "Residues and Derivations in Three Articles on Pareto," *Journal of Social Philosophy*, Vol. 1, no. 2, pp. 175–179.
- Croce, B., "The Validity of Pareto's Theories," *The Saturday Review of Literature*, Vol. XII, No. 4, May 25, 1935, pp. 12–13.
- Culler, J., *Saussure*, Fontana Press, 1976. J. カラー『ソシュール』川本茂雄訳、岩波書店、1978年。
- Freund, J., *PARETO, la théorie de l'équilibre*, Seghers, Paris, 1974. 『パレート—均衡理論—』小口信吉 板倉達文訳、文化書房博文社、1991年。
- Ginsberg, M., "Pareto's General Sociology," *The Sociological Review*, XXVIII, 3, July 1936, pp. 221–245.
- , *Reason and Unreason in Society*, Longmans Green, 1948, Chap. VI: "The Sociology of Pareto."
- Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1937. L. J. ヘンダーソン『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』組織行動研究会訳、東洋書店、1975年。
- , *Sociology 23 Lectures*, 1941–42 edition, previously unpublished.
- , "Pareto's Science of Society," *Saturday Review of Literature* 25 May 1935, pp. 3–4, 10.
- , "What is Social Progress?" *Proceedings of the American academy of Art and Sciences* 73 (1941) : pp. 457–463.
- Heyl, B. S., "The Harvard Pareto Circle," *Journal of History Behavioral Sciences*, Vol. IV, No. IV, Oct, 1968.
- Homans, G. C. and Curtis, Charles P., *An Introduction to Pareto. His Sociology*, Knopf, New York, 1934.
- Hughes, H. S., *Consciousness and Society*, Alfred A. Knopf, Inc., New York. 1958. 生松敬三 荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房、1970年。
- McDougall, W., "Pareto as a Psychologist," *Journal of Social Philosophy*, Vol. I, no. 1, pp. 36–52.
- Pareto, V., *Trattato di Sociologia Generale*, G. Barbéra, 1916. 『社会学大綱』北川隆吉 廣田明 板倉達文訳、青木書店、1987年。 *The Mind and Society. A Treatise on General Sociology*, Translated by Andrew Bongiorno and Arthur Livingston, New York; Harcourt Brace, 1935.
- Parry, G., *Political Elites*, George Allen & Unwin Ltd, 1969. G. パリティ『政治エリート』中久朗他訳、世界思想社、1982年。
- Parsons, T., "Review of Mind and Society by V. Pareto and Pareto's General Sociology by L. J. Henderson," *American Economic Review*, Vol. XXV, 1935, PP. 502–508.
- , "Pareto's Central Analytical Scheme," *Journal of Social Philosophy*. Vol. I, 3, pp. 244–246, 1936.
- , *The Structure of Social Action*, McGraw-Hill ed. 1937. T. パーソンズ『社会的行為の構造』稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳、木鐸社、1976～1989年。
- , "The Present Position and Prospects of Systematic Theory in Sociology," in Gurwitsch, G. and Moore, W. (eds), *Twentieth Century Sociology*, New York: Philosophical Library, 1945, reprinted in *Essays in Sociological Theory*.
- , *Essays in Sociological Theory*, The Free Press, 1949.
- , *The Social System*, The Free Press, 1951. T. パーソンズ『社会体系論』佐藤勉訳、青木書店、1974年。
- , *Toward a General Theory of Action*, editor and contributor with Edward A. Shils and Edward C. Tolman, Gordon W. Allport, Clyde Kluckhohn, Henry A. Murray, Robert R. Sears, Richard C. Sheldon, Samuel A. Stouffer, Harvard University Press, 1951. T. パーソンズ『行為の総合理論を目指して』永井道雄・作田啓一・橋本貞訳、日本評論社、1960年。
- , "General Theory in Sociology," in

- Merton,R.K.,Broom,L.and Cottrell,L.S.,Jr, (eds.),
Sociology Today,New York Basic Books,1958.
- ,“An Approach to Psychological Theory
 in terms of the Theory of Action,”Koch Sigmund (ed.),*PSYCHOLOGY*,1959.
- ,“PARETO,VILFREDO : Contribution to
 Sociology,” in D.L.Sills (ed.) *International Encyclopedia of Social Sciences*,New York,Macmillan,
 1968,Vol.XI,pp.411–415.
- , *Social Systems and the Evolution of Action
 Theory*,The Free Press,1977.T. パーソンズ『社会
 体系と行為理論の展開』田野崎昭夫監訳、誠心書房、
 1992年。
- , *Action Theory and the Human Condition*.
 The Free Press,1978.
- Russett.C.E.,*The Concept of Equilibrium in American
 Social Thought*,New Haven : York University
 Press,1966.
- Sorokin,P.,*Contemporary Sociological Theories*,Harper
 & Brothers,New York and London,1928.
- Schumpeter,J.A.,“Vifredo Pareto (1848–1923),” *The
 Quarterly Journal of Economics*;LVIII,2,May
 1949,pp.147–173.
- Sica,A.,*Weber,Irrationality and Social Order*,Berkley:
 University of California Press,1988.
- Stark,W.,“In Serch of the Ture Pareto,” *The British
 Journal of Sociology*,XIV,2,June,1963,pp.103–13.
- Zaitlin,I.M., *Ideology and the Development of Sociolog-
 ical Theory*,Prentice–Hall, Inc.,1968.
- 新睦人・中野秀一郎『社会システムの考え方』友斐閣選
 書,1982年。
- 池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書,1984年。
- 佐藤茂行『イデオロギーと神話』木鐸社,1993年。
- 新明正道『社会学的機能主義』誠信書房,1967年。
- 『現代知識社会学論』巖松堂書店,1935年。
- 高城和義『パーソンズの理論体系』日本評論社,1986年。
- 『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店、
 1992年。
- 富永健一『現代の社会科学者』講談社学術文庫,1993年。
- 永瀬伸介「Vilfredo Pareto 科学論の素描的レリーフか
 らする方法論的客観性と方法論的社会」経済科学、
 149–168頁、1978年。
- 日向寺純雄「パレート社会学とイタリア財政社会学」青
 山経済論集、第34巻3号、1–23頁、1982年。
- 松島敦茂『経済から社会へーパレートの生涯と思想ー』
 みすず書房,1985年。
- 丸山圭三郎『シュールの思想』岩波書店,1981年。
- 『文化のフェティシズム』勁草書房 1984年。